

## 2006年1～2月掲載分

- 相模原 西澤 桃園  
日の丸を振って参賀の中にあり  
青空の二日の皇居松清し  
獅子舞の太鼓は青き眼の男  
なんとなく幸せさうな福寿草  
初手前金平糖をお茶請けに
- 習志野 大慈弥 爽子  
吹き晴れし富士麗はしき今朝の春  
まぶしさもおぼつかなさも春着の歩  
巡礼の音たて踏める霜柱  
寒林をぬけ来し君のきらきらす  
どよめきの真っ只中へ豆を撒く
- 十勝 高田 峙鳥  
降りつぷりよき奥蝦夷の雪なれば  
息つく間なし地吹雪の十勝かな  
峠さす除雪車一両また一両  
オリオンをしかと掲げし大冬木  
日本酒にしくなしおでん煮えにけり
- 横浜 川田 田鶴子  
よく晴れて日がな富士見ゆ三ッ日  
若者の屠蘇をワインに替へ祝ふ  
初活けの太き青竹匂ひけり  
日溜りに移りてよりの御慶かな  
ポップンを吹きて童心生まれけり
- 秦野 後藤 文彦  
泥中に泥鰯を掘れば細(ささ)濁り  
泥鰯掘る男のロマン見え隠れ  
泥鰯掘るいとしと思ひすぐ放つ  
泥鰯掘る誰(た)も鍋のこと口にせず  
たまさかに鰯にかゝりし泥鰯掘る
- 相模原 後藤 慶  
邂逅も惜別もあり日記果つ  
冬帝の号におののく山河かな  
人集ひペーチカよく燃えよく弾け  
毛皮着て毛皮に着られてをりにけり  
ちゃんちゃんこあんよ上手で愛嬌よし
- さいたま 宮崎 美智子  
白障子夜更けの風を聞いてをり  
少年の小さなウソに木の葉舞ふ  
冬の霧灯のともりをり無人駅  
冬晴や家豊かなる散居村  
朝市に袖引かれ買ふ松葉蟹
- 藤沢 藤田 富子  
園丁の搔くそばからの落葉かな  
冬晴や冠雪の富士仰ぎ見る  
神の杜静寂のなか鴟高音  
蔦紅葉古びし館輝へる  
木の葉髪互いの老を思ひやり
- 町田 小森 正彦  
水仙香日本海に落つ崖にみち  
登り道急なればこそ色寒桜  
冬至日やはや賑はへる神谷バー  
ふぞろひの氷柱に読めし音符かな  
十七人の僧息揃う時除夜の鐘

## 2006年3～4月掲載分

- 十勝 高田 峙鳥  
水道管凍てにし話あちこちに  
はなやぎて一夜の氷燈祭かな  
冴返る広野に風の棲く十勝  
早春の山に向ひて歩を伸ばす  
師のおはす河内野とほし正行忌
- 藤沢 藤田 富子  
色とりどり花舗の明るき春の午后  
曇降る傘を持つ手の無感覚  
朝刊を湿らせてみる夜半の雪  
鬼やらひ小声に鬼も出てゆかず  
工事場の空缶焚火囲みをり
- 相模原 西澤 桃園  
満開の花青空を埋めつくし  
まどろみて西行の和歌花の下  
やまざくら大和心を憶はせし  
花の塵濡れつきしまま母娘傘  
花びらの群と群とが交はれり
- 横浜 川田 田鶴子  
春の海光り入江の舳ひ舟  
舟音の時折過ぐる梅岬  
鰯干す今は昔の陣屋跡  
春光の入らぬ郭の太格子  
雛飾る郭格子の窓近く
- さいたま 宮崎 美智子  
陽炎を走り抜けたる親子猿  
片言もおうむがえしも入園す  
ランドセル身丈半分かくれけり  
春風に髪さらさらと幼の走る  
猫の子の声どこからか無人駅
- 町田 小森 正彦  
白魚を閉じ込む仕掛け潮の道  
強東風に海鷗は威厳を崩さざる  
真っ直ぐにただ只管に猫の恋  
春昼の亀の甲羅は南向き  
放棄田の細き流れや諸子とり

## 2006年5～6月掲載分

習志野 大慈弥 爽子  
 一望にさねさし相模夏霞  
 夏潮にふれなむと行く岩畳  
 くむ足のすらりと長く夏めける  
 素通りの出来ぬ匂ひに烏賊を焼く  
 とれたての鱻のたたきにほすビール

相模原 西澤 桃園  
 バス待ちの時苦にならず花水木  
 貯水池を巡る堤の草茂る  
 緑陰の広きは高麗の社跡  
 虎の尾に遊び心の戯れて  
 黒南風や小田原藩の台場跡

十勝 高田 峙鳥  
 風光る新車のお札授かりぬ  
 子のこゑが春の坂道駆けてゆく  
 悠悠のことは贈りぬ春の雲  
 春雨や美術館へのゆるき坂  
 子の遠しひとり土筆を摘む日かな

さいたま 宮崎 美智子  
 花冷へや灯を引き寄せて語りをり  
 花屑を包む両手に弾みあり  
 花の山色を違へて遠近に  
 春まつり水の都の舟支度  
 ケン玉の大道芸や春疾風

藤沢 藤田 富子  
 囀りのなかに農夫の腰のばす  
 息かけて拭ふ眼鏡や青葉風  
 終日を語る人なく暮遅し  
 藤房の風の通ひ路やはらかし  
 葉の匂ひ郷愁を呼ぶ桜餅

町田 小森 正彦  
 高虚子の生まれし街の樟若葉  
 島繋ぐ橋のロープに風光る  
 春潮の流れ激しき水軍城  
 金剛杖を重くしている菜種梅雨  
 小京都花一輪咲きはじむ

## 2006年7～8月掲載分

習志野 大慈彌 爽子  
 海開き終へ海の色整ひし  
 万緑の奈落到十戸ほどの里  
 さしそめし光に透ける蓮の花  
 みつめ合ひひかりあふ恋星祭  
 寄添ふてなほ流灯の闇深む

十勝 高田 峙鳥  
 菜園の草取る加勢受けにけり  
 朝夕に菜園のアスパラを採る  
 菜園のアスパラけふはほどの家に  
 ひと叢のうど山菜の王者たり  
 大ぶりの山うど気前よく配る

さいたま 宮崎 美智子  
 袖口へ風深く入れ御輿担(か)く  
 リニューアルの伝法院通り夏祭  
 菖蒲田に雅な名札並びあり  
 未草未の刻を知って咲く  
 麦秋の波うつ穂先風のまま

藤沢 藤田 富子  
 熱に臥し熱に明けたる夜の短か  
 夏めくや木洩れ日のなか足ならし  
 大黒の友ゐる寺にさつき燃ゆ  
 強き日にそろそろ出番夏帽子  
 梨園より便りせわしく袋掛

町田 小森 まさ彦  
 里山に特許許可局時鳥  
 果て見えぬ畝に立ちいて閑古鳥  
 大利根に流りくる声行々子  
 五月晴れ迷うているには見えぬ亀  
 夏至の日の尖るる山に沈みゆく

2006年9～10月掲載分

十勝 高田 峙鳥  
クーラーのなし窓々を開け放つ  
炎熱を小盆栽とともに耐ゆ  
梅干して老妻稀なる元気かな  
寝たりたる心地に覚めし今朝の秋  
無糖コーヒー飲んで一人や秋涼し

藤沢 藤田 富子  
工事場の男逞し玉の汗  
しのぎ易き涼風うけてひと眠り  
食欲の乏しき日々の冷奴  
太古の花と称えられ来し蓮の花  
朝まだき蟬の声して目覚めけり

さいたま 宮崎 美智子  
白玉を今風の器に盛り分くる  
鈴虫の声に艶ますきのふ今日  
我が身丈越したる孫の盆踊  
落日の赤赤と染み秋暑し  
あめんぼう大波小波すいと越ゆ

町田 小森まさ彦  
熱闘につかの間の寂青ハンカチーフ  
爽涼の滑り込みくる朝であり  
世話し甲斐あるやっちやのう酔芙蓉  
宵闇の藪に花の香烏瓜  
夕開き朝に花閉じ烏瓜

昭島市 しもだ・たかし  
欲望と言へば暑苦しき言葉  
門灯の消えず一家の帰省中  
盆の月見ゆるとメール直ぐに見る  
星の流れにと言ふ歌を聴く盆の夜半  
青瓢やや腹太くなり親し

2006年11～12月掲載分

十勝 高田 峙鳥  
母ありし日なつかしむ菊日和  
目を閉じてねと弾きはじむ秋の夜  
名産の以ての外てふ菊脛  
妻右往左往秋の雷はげし  
省みるけふの一日やぬくめ酒

さいたま 宮崎 美智子  
探鳥の秋の山路に刻忘る  
縄張りに強気の鴟の一羽みて  
幾度も転び抱き上ぐ七五三  
和紙の里道に灯籠秋祭  
けものみち抜けて付きたる草風

藤沢 藤田 富子  
秋高し空に威を張る天守閣  
忘れぐせ無駄な刻過ぐ秋の暮  
古戦場草間にすたく虫の声  
稲掛や田に影落す夕あかり  
そこはかとなき淋しさや秋の雨

町田 小森 まさ彦  
鴟の水尾都心の池の寥をのあり  
夕照に色を増したる石路の花  
復元の宿に正しく懸大根  
粉々になりても銀杏落葉の色であり  
大枯野丹頂の声空にあり

習志野 大慈彌 爽子  
電球のゆれて羽子板市真っ赤  
みみづくの瞑想風をふくらます  
ガブリエル現れさうな冬の晴  
足元も頭上も注意雪解急  
成人の日の玉砂利の音若し

昭島 しもだ・たかし  
夕鴟や喪家のごときたたずまひ  
鴟の声残し天辺ゆれてをり  
酔ひ潰れたるはあはれや芙蓉摘む  
秋水の激し落ち人寄らしめず  
山水潺々邯鄲昼を鳴く